



寺院紀行

群馬・伊勢崎 雲晴院 真山剛

ぶつぶつ放談

浄土真宗本願寺派と真宗大谷派のここが違う その2
藤村潔 宮本義宣

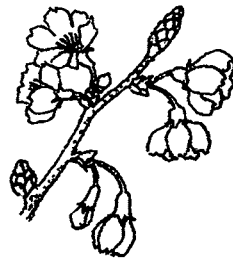
特別寄稿

崇源院ひとり語り(前編) 深川純子

浄土

2023/4月号 目次

新連載 心に響く言葉①	長谷川岱潤	表2
カラ―グラビア=寺院紀行 群馬・伊勢崎 雲晴院	真山 剛	1
寺院紀行 群馬・伊勢崎 雲晴院	真山 剛	6
特別寄稿 崇源院ひとり語り(前編)	深川純子	12
寺々刻々② 仏教と親和性が高い ChatGPT	鶴飼秀徳	20
ぶつぶつ放談 お東とお西の違い その2	藤村 潔 宮本義宣	24
浄土掲示板		31
林海庵・開教奮闘記⑧ 寄り添う(中)	笠原泰淳	32
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人⑨	ぐんじまん	37
あなたもお寺のCIO ⑫ 今年抑えておきたい IT トレンド	小路竜嗣	40
微風吹動 仏教者の使命	石田一裕	44
江戸日本の街道探訪 第23回 奥州街道3	森 清鑑	48
みんなの境内 法衣の話	安藤健作	55
編集後記		56



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=貞林院瑞正寺二十五世 林錦洞「菩」金文文字

アートディレクション=近藤十四郎

8

寄り添う(中)

開教奮闘記

林海庵開山上人

笠原泰淳



かさはら たいじゅん

昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。日本通運(株)に入社、八年勤務し浄土宗東京教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十年勤務。平成十四年「林海庵」を設立。翌年、同寺が浄土宗寺院として承認され住職となる。現在、浄土宗開教振興協会副理事長。

四摂法（ししようぼう）という言葉をご存じだ
と思う。

布施・愛語・利行・同事は四摂法といわれ、大
乗の菩薩たちはこれらをもつて衆生を導く―これ
が辞書的な説明だ。

浄土宗では専修念仏が第一であり、自力の菩薩
行はあまり説かれない。菩薩行は浄土往生のため
の条件ではないのだ。だが、衆生を念仏に導くこ
とを私たちの目的とするならば、その目的を達成
する手段としてさまざま手立てを考えても良い
だろう。「寄り添い」「傾聴」は、念仏実践に衆生
を導くための前段階、いわば四摂法そのものとい
えることもできるのではないだろうか。私は開教活
動を通じてずっとそのように思ってきた。今回は
そのことを少し書かせて頂きたい。

四摂法の第一は布施。

私たちは、不幸や悲しみのうちにある方に何を

提供できるだろうか。まずは場所である。寺の一
隅、清潔で気分が落ち着くスペースをしばしの間、
提供することができる。稀少な軸物や高価な花器
を置く必要はない。安全でくつろげる場所があれ
ば良い。（もちろん檀信徒のご自宅や喫茶店でも
よいわけだ。）次に時間。私たちはあらかじめ時
間を定め、その時間をその方のために使う。そし
てもう一つは「ここにいる」ということ。私たち
が開かれた心をもつてその方と共にいることができ
れば、それだけでも助けになるだろう。「いる
ということ」を提供する。もし私たちの心が「こ
こにあらず」では役に立たない。次の予定が気
になつて腕時計をチラチラ見たり、貧乏ゆすりをし
ているようであれば、それは「ここにいる」こと
にはならない。「私は、忙しいのに我慢しながら
あなたと一緒にいるのですよ」というシグナルを
発していることになる。

第二は愛語。

優しい心のこもった言葉だ。たとえば葬儀の知らせが入ったとき。戒名作成のために、ご遺族に故人の人となりを尋ねる場合もある。これは私の例だが、

「どのようなお方でられますか。」

ご遺族の心の中では、故人はまだ「過去の人」ではないかもしれない。現在形を使うというのも一つの思いやりであろう。

死因について尋ねる場合もあるかもしれない。

「しばらくお悪かったですか。」

遠回しなようだが、この間いでご遺族が言葉を濁されるようであれば、それ以上は尋ねないようになっている。

また、言葉の背後の気持ちも大切だ。

「しばらくお悪かったですか。」

こちらの気持ちも「死因を教えてください。」であれば、訊問調の響きを帯びてしまうことだら

う。「どうしてそんなことをあなたに話さなければならぬのですか」と思われてしまうかもしれない。私の印象だが、癌で亡くなられた場合、ご遺族は病名を言うのに抵抗を感じることが多い。また自死の場合などは、触れて欲しくない最たるケースだろう。訊問調の質問は避けなければならぬ。

「しばらくお悪かったですか。」

(大変だったでしょうね。)

(つらかった時のお話をなきつても良いのですよ。)(もし今話したくなければ、無理にお話なさらなくても良いのですよ)

このような気持ちを胸に抱いて尋ねれば、相手も心を開いてくれるかもしれない。

「愛語」は気持ちから生まれてくるのであって、決してテクニクではない。だがどうすれば「優しい心のこもった言葉」になるのか。そこは日頃の工夫のしどころだと思う。嘘のない言葉。思い



静かで落ち着いている
林海庵の応接間

やりに満ちた言葉。宗内の研修でも、「私はこのように工夫して言葉がけをしています」という実例をシェアすると良いのではなからうか。

第三は利行。行動である。

私はどちらかというと言が重い方で、行動するのはあまり得意ではない。だが、色々と相談に乗っているうちに、行動した方が早いという場合もある。

霊園墓地にお墓を建てたい、と言う方を車に乗せてあちこちの霊園を見に行く。本位牌を作る方のために施主に同行して仏具店に行く。仏壇を置く場所についての相談に乗りながら、「ご自宅に行ってお部屋を拝見しましょう」ということもある。

言葉で説明するよりもその方が早いと思われるときには、ふだんはものぐさな身体が自然に動く。行動といっても、ご家族間のトラブルの相談があった場合は、原則的には介入しない。かえってことがこじれてしまうからだ。だが、どうしても黙っていられなくなつて介入したこともある。

大切なのは、自分の自己主張を通すために行動するのではなく、あくまで相談者の役に立つことを目的として行動するということである。万一結果が裏目に出たならば、状況改善のために全力を尽くす。

第四は同事。

事を同じくする、苦楽をともにする。寄り添うということそのものだ。前回、いのちの電話の研修について書いた。私たち僧侶にそのような長期の研修が必要だとは思わないが、多少の心構えはあった方がよい。僧侶の心ない言葉によって傷ついた、という話はよく耳にする。

特に、慰めの言葉や励ましの言葉には注意を要する。ほとんどの場合、それらは先方のためというよりも、慰めや励ましの言葉を発する側が楽になるためのものだからだ。相手とのやりとりの中で、相手の悲しさ苦しさの中に一緒に止まり続けるのはつらいことだ。だから、そのつらい場から逃れようとする。そこで慰めや励ましの言葉をかける。だがそのつらい場から逃れることができるのは慰めや励ましの言葉を発した人だけ。慰められた方、励まされた方は孤独感の中に残り残される。研修の場であればともかく、実際の場では、その言葉を言われてどう感じたかを言ってくれる人

はほとんどいない。

「住職さんに〇〇と言われた時、私は胸の内△△のような感じがしたのです。」

こんなことを言つて下さる方はまずいないだろう。ただその方の心が離れてゆくだけだ。

とはいえ同事、事を同じくするといつても本当に苦楽をともにすることはできない。当の本人ではないのだから。ただ想像力を使いながら、心を開いてそつと横に坐る感じ。公園のベンチに横に並んで坐る感じだろうか。

話に耳を傾けていると、ときには話し手の激しい感情、激流に巻き込まれそうになることもある。その場で凍りついてしまつて何も言えないときもある。それで良いと思う。片手で阿弥陀さまのおみ足にしっかりと掴まっていれば、たとえ身体の一部が激流に巻き込まれても、全身が飲み込まれてしまうことはないだろう。

ここでも阿弥陀さまが頼りだ。そう思う。